

六花



2009

平成21年

俳句雑誌 りつか
chairman Yamada Rokko
secondary c, and the
editor in chief Kotori
cover designed by little bird

6月号

たん
丹

夜濯ぎ

山田六甲

よ び ど け だ き う よ び
夜濯ぎの母の背中へ負ぶさりぬ
美人画のやうに浴衣を干しにけり
毒毛虫肩這ひゐるを気付かざる
罌粟坊主跡形もなく摘まれけり
駄菓子屋の黄粉ふんだんわらび餅
気が付かば木の枝を払ひ過ぎにけり
瓜冷し水のたちまち黄金なる
夜涼みや寒天菓子すすり込み
美人湯に新樹より冷え降りきたる

う 後ろより闇憑やみき来たる虫送り

に 蕪にら刻きざむ冷やし素麵そうめん冷やしつつ

ん んがんとお化け屋敷を逃げ出たる

じ 馬鈴薯じやがいもの花に雨靴近寄りぬ

や 破れても金魚掬すくふを諦あきらめず

な 夏草に自転車を降おり倒れ込む

い 石鯛いしだいの釣り上げられて身じろがず

あ 鮎あしを焼く香りに筆を措おきにけり

ら 辣蕪らつきようの匂へる祖母につきまどふ

う よ び ど け だ き う よ び
器 蓬 天 緞 境 抱 き 黄 浮 よ 敏
出 より 鷺 子 内 き 緑 き 登 捷
す 夏 絨 子 の の 上 緑 に 来 樹 に
音 香 包 更 櫛 花 鉢 塗 樹 分 飛
ぞ 味 ま り 樟 花 の 替 替 枝 目 へ
涼 し しか 薄 日 薔 薔 五 金 交
き 確 れ 差 薇 月 魚 ふ
夏 かな 更 かな 五月 掬 螢
料 かな 衣 かな 晴 かな
理 かな

に 丹にの橋はしに五月さみ雨だれの音ね初う々い々いし
ん と小ちさく言いふのみ皐さ月つき愁うれいの子こ
じ 腎じん臟ぞうの位置ちを揉もみつつ梅つゆ雨ごも籠り
や やはらかな庭にわとなりけり梅うめは実みに
な なめらかに翼つばさあつかひ鷺さぎゆけり
い 言いひ隠かくすごとくなりけり螢ほたる火びは
あ 粗あら塩じおを指さもて舐なめる走はし梅り雨つゆ
ら 乱らん取どりの声こゑ五さ月み雨だれを突つき抜ぬけり

笹鳴やこころ病む子の耳聡く

松本文一郎

やさなきやこころやむこのみさとく

健康状態によつて、音の聞こえ方、感じ方が大きく違うところを鋭く洞察して詠みとめた。

「笹鳴」は冬、鶯の鳴き声はまだ調わず、チャツチャツと舌鼓を打つように鳴くことで、俳人にとつては春待つ心が笹鳴きに趣を感じさせる。しかしその一方で心病む人にとつては、煩わしく、時には恐怖心を煽る事さえあるのではないだろうか。心病まらずとも病中は特に、音には敏感になる。

襖^{ふすま}絵^えの龍^{りゆう}虎^こ相^{あい}撃^うつ節^{せつ}分^{ぶん}会^{かい}

山^{やま}焼^やや舐^なめるが如^{ごと}き火^ひの走^はり

逆^{さか}立^たちに蜜^{みつ}を吸^すひひる目^め白^{しろ}かな

霾^{つひ}や足^{あし}跡^{あと}続^つく屋^や根^ねの上^{の上}

※ 霾^{つひ} || 黄^{おう}砂^さ

雛の旅

木内美保子

野鼠のねずみが走る川辺の犬ふぐり
逃げさうな眼をして焼かる桜鯛さくらだいたい
庭の昼辛夷こぶしぽろりと肌着脱ぐ
流れ藻ながもと共にさすろう雛の旅
桃咲いて薄桃色の風匂ふ

神の鶏

笹村政子

春泥しゅんでいに尾を引きずれる神の鶏
次々と叶き出され来て小鳥引く
行者場ぎようじやばにはりつきぬたる石尊あおさかな
海女あま小屋この固かき門かど鳥とり交まる
雪解ゆきげ霽ものろしのごとく上がりけり

せつじゆしゆう
雪樹集

春の鯉こい

永田 勇

冬の川縦長たてながに灯ひの揺れてをり
右肩を濡らしてゐたる冬の雨
引潮ひきしおの石を突つける千鳥ちどりかな
川上かみを向きてとどまる春の鯉
春水しゅんすいの堰せきにて泡の生まれけり

老梅らうばい

池崎るり子

梅林に人影まばら雲白し
老梅の蕾つぼみふつくら紅べになせり
春惜しむ歪ゆがみし背骨にて歩き
群むれなして鳴の知らぬ鳥帰りゆく
春光しゅんこうや孔雀くじやくの歩みゆつたりと

蛍雪譚 六甲

泥道に螺細のごとく梅落花

平居 津子

梅の散った様を美しく表現。散った梅の花片が虹色にかがやく貝細工のように感じさせるのは句の力である。

天竜のしぶきに春の匂ひかな

堤内久美子

天竜下り(?)の水しぶきに春を匂い取ったのがいい。「川下り・船遊び」は夏の季節であるから、「下り」や「舟」の語をさけて「天竜の」に止めたと思われる。作品だから解釈すれば天竜川の水しぶきであり、それだけでも充分よい作品だ。

水底を闘竜灘の鮎走る

藤原 春子

闘竜灘という地名が水の速さを表して効果的。闘竜灘は、加古川上流の断層地帯に露出した岩場。その岩に狭められた流れが、滝を寝かしたように急流となり名の通り、竜の闘いを感じさせる、出水の時などは恐

ろしくて近づけない（…私だけかも）。掲句は水嵩の
多くない時の様子である。川岸には鮎宿がある。天然
鮎は美しい。

大川に春の小川の入りにけり

松本 蓉子

大川といえば大阪では天満あたりを流れる旧淀川の
ことだが、掲句は地名の大川ではなく、一級河川のこ
とだろう。その本流へ支流が合流する。支流に名前は
ないが春の小川。その小川が流れ込んで大川も春らし
い川にへなるのである。

六花集

六甲選

平居 滯子

山笑ふいくつもの滝ふところに
泥道に螺鈿のごとく梅落花
山門に獺の彫物春の雪
立雛の帯美しき灯かな
うららかや絵本より音あふれ出て

堤内久美子

春怒濤日差しもどりし日本海
天竜のしぶきに春の匂ひかな
せせらぎに沿つて芹生ひるたりけり
お遍路の鈴遠ざかる吉野川
春灯の川面にゆらぎをりにけり